

アジアにおける日本宗教教団の活動とその異民族教育に関する覚書

――満洲における仏教教団の活動――

梶 木 瑞 生

キーワード…満洲、仏教教団、異民族教育

はじめに

二十世紀前半は日本人が最も活発に海外活動を行った時期である。その流れに乗って様々な宗教教団も海外、特にアジア各地の布教活動のために多くの関係者を送り出すことになった。しかしその活動の多くは在留邦人を対象とした布教活動であって、異民族に対する布教活動はそれほど多くはなかったと言われる。しかしこうした異民族対象の活動の経験こそ、善きにつけ悪しきにつけ、このグローバル化の時代に私たちが学ばなければならないものを持っている。

布教活動とは、単にその宗教の宗旨を伝える活動をすればすむ訳ではない。宗旨を理解してもらうためには、布教以外の様々な活動を行わなければならない。特に二十世紀前半のアジア大陸における布教活動では、

アジアにおける日本宗教教団の活動とその異民族教育に関する覚書

教育活動、医療活動、貧困者への授産活動、その他多様な活動が行われた。それは日本人を対象にした場合だけでなく、異民族を対象にした場合も同様であった。

こうした多様な布教活動は、欧米系のミッションの活動に倣ったというよりは、むしろ宗教の本来の活動に含まれているものであった。日本の伝統的な宗教教団である仏教の場合も、二十世紀以前から日本国内でこうした活動を行ってきたし、今日でもあらゆる教団の布教活動はそうした活動を含んで行われている。アジア各地で展開された布教活動は、こうした経験や伝統を受けたものであった。そのためにアジア各地で多様な活動を含む布教活動を行うことは、活動に参加した宗教者からすればごく自然な発想であった。

しかしそれにもかかわらず二十世紀前半の布教活動には、宗教本来のものと違う側面を持っていたことも間違いない。そしてそのために、欧米先進国の布教活動とともに、日本の教団の布教活動も、アジア各地の異民族からは宗教布教のための自然な活動とは受け止められず、多くの摩擦を生み出した。本論では、二十世紀前半のアジア各地における日本の布教活動の在り方を明らかにし、これからの異民族布教の在り方を考えようとするものである。

こうした布教活動の中で特に、南中国布教とともに日本のアジア布教の先進地であった、満洲布教の姿を見て行く。満洲では数多くの神社や寺院が作られたが、それにもかかわらず異民族に対する布教活動はほとんど行われなかった。それだけに満洲で行われた異民族に対する布教活動の僅かな例は、日本の布教活動の課題や問題点をより明確に示していると考えられる。

二十世紀前半のアジア布教の問題は、戦後の日本の研究者にとってあまり関心を引くものではなかった。ようやく、それも七十年代も後半になって、中濃教篤などごく一部の人々が研究の口火を切った。いろいろな問題を含む研究であったが、それでもごく最近まで、その後を追ってこの課題に触れる研究者はほとんどいなかった。

ここ数年、大谷大学や龍谷大学あるいは一部の宗派の研究者の手によって、幾つかの論作や資料集の作成が試みられている。しかしこれまでの研究状況は、ようやく資料の整理、あるいは問題の整理に手がついたと

言える段階である。これからはさらに、アジアにおける日本人の宗教活動を、日本人のアジアにおける活動全体の中に位置付け、その宗教活動の社会的、文化的、引いては政治的、経済的、あるいは軍事的な意味を見いだして行かなければならないと考える。本論はそうした位置付けを行うための試みの研究である。

さらに、ここではそうした布教活動を、教団の手になる教育活動に絞って見て行く。

二十世紀前半の布教活動の中で、特に複雑な問題を抱えているのは教育活動である。もともと教育活動は社会への同化を目的とするものである。特に近代教育は一定の地域に住む住民を、文化や民族の違いを越えて、国民という名の下に統合しようという試みであった。その意味で宗主国への同化を目的とする植民地教育と、国民統合を目指す近代教育はある部分に共通の性格を持つものと言える。

異文化への同化を目指す教育は、すぐれた文化へのあこがれを生み出すとともに、その反対に異文化への反発をも生み出す。その点で宗旨に同化を求める布教活動と、似たような側面を持っている。そのために例えば宗主国が経営する植民地の近代学校では、教育を心から受け入れる生徒がいる反面、しばしばその学校は反植民地運動の攻撃目標になるなど、二重の意味で強い反応が生まれるのである。つまり布教活動が宗旨への同化を求めるとするならば、その布教活動に伴う教育活動は、近代化への同化を含めて、複雑な同化にかかわる問題を抱えることになる。

二十世紀前半のアジアにおける教団の教育活動には、当然のことながら、植民地、占領地における宗教活動という背景が張り付いている。そのために布教活動には、文化の問題だけではなく、支配、被支配の問題が伴う。日本の布教活動のほとんどが在留邦人相手の布教であつたという事情から、宗派内部でもこうした問題の、影の部分に対する意識は薄かつた。そして今日でも宗教者の間で異民族支配の問題を議論されることは少ない。しかし支配、被支配の問題は、どのように日本の布教活動の中に入り込んだかという問題とともに、これから検討しなければならぬ課題である。もちろんこの課題は、欧米先進国の植民地における布教の問題、アジアで言えば中国や韓国、台湾における欧米系ミッションの布教や宗教学校の問題を考える時にも欠くことができない。

この宗教教団の教育活動については、近年、少しずつではあるが研究が進められている。例えば天理教については、深川治道の中国大陸における日本語教育についての論作¹⁾がある。またキリスト教の活動については山崎朋子が、北京の崇貞女学校の姿を明らかにしようとしている²⁾。同じくキリスト教の自由学園の活動については、北京生活学校に関する内田知行のものがある³⁾。仏教教団の教育活動については近年、木場明志、桂華淳祥、小島勝⁴⁾、あるいは筆者の論作⁵⁾などが出るようになった。そしてその研究のために研究の組織が組まれるようになった。しかしそれにしても、現在ごく一部のケースが明らかになっているだけで、資料も含めて、全体像はいまだに闇の中である。

本論では、満洲で異民族教育に従事した宗教関係者を拾い上げて、その行動を点検して見た。しかし満洲における宗教関係者の活動の全体像が明らかになっていないこともあって、その検討にはかなり難しい問題が残っている。これからは日清、日露の戦争を含めて日中戦争期における教団の活動を調べることに共に、特に軍部との関係、軍部の宣撫工作との関係などが検討の対象であろう。また日中戦争期の布教活動と、宗教関係者が異民族、異文化をどのように受け入れたかなどは、まさにこれからの課題である。

最後に満洲ということばについて述べておこう。もともと満洲とは、日本人の日本海対岸意識を現した歴史的な表現であつた。十九世紀頃の満洲は、沿海州を含めたシベリア南部から松花江流域を含む地域を指すものであつたが、やがて中国東北地区南部から東北地区全体を示すようになる。日中戦争期になると、日本の占領が蒙疆や華北を含む地域に拡大するにともなつて、蒙疆や華北は満洲の延長として意識された。従つて、満洲とは時代によつて変化した概念であり、現実の中国東北地区とはかならずしも一致するものではない。

本論では日本の教団の活動を問題とするから、できるだけ日本人の意識に沿つて論を展開したい。従つて問題を中国東北地区だけに限定することをせず、満洲全体を視野に入れるつもりである。

一、西本願寺と異民族への布教活動

浄土真宗西本願寺は、一八九一年（明治二十四年）に多聞連明をウラジオストクへ派遣して、シベリア開教（布教）に手を染めた。しかしその主たる活動は在留邦人を対象としたもので、ロシア人や在留朝鮮族を対象としたものではなかったようである。ところが一九〇三年（明治三十六年）に「浦潮本願寺布教所主任」として太田覚眠がウラジオへやって来たが、太田の視野には日本人だけでなく、ロシア人や在留朝鮮族が入っていたと思われる。

日露戦争の開始によって太田自身がウラジオから退去を余儀なくされ、「浦潮本願寺」も一時閉鎖されるが、一九〇六年（明治三十九年）太田の手によって再建されて、布教が開始される。「浦潮日報」^③には浦潮本願寺の活動についての数多くの記事が掲載されているが、例えばその中には本願寺の「地久節の祝賀会」を報ずるものがあり、また、毎週行われる説教（教説）の予告があった。そしてその説教の教師として、毎回のように太田覚眠の名前が出てくる。このようにウラジオでも、ほぼ内地と同じ布教活動が行われていたのであるが、ただこうした活動の多くは、ほとんど在留邦人を対象としていたようである。

しかし太田の活動にはもう一つの側面がある。太田宏宣の「父覚眠の思い出」^④には、太田の布教についてのエピソードが幾つか綴られている。その一つに次のようなものがある。太田はウラジオにいる間ずっと、「路傍の乞食に銅貨を一枚ずつ施与した」。それも「散歩するついでに見

当り次第施与した」という。その「路傍の乞食」の中にはロシア人がいた。その後立ち直って一人前の仕事をするようになって、かつて施しを受けたことを恩義に感じて、太田を大変尊敬していたという。こうした話から見ると、太田は在留邦人だけでなく、ロシア人にも宗教家として働きかけていたことが分かる。

また外務省記録には明治四三年十月一日付けの、「浦潮総領事」大島富太郎から小村寿太郎外務大臣宛の次のような報告書が残されている。

第八九号 太田某計画ノ朝鮮人授産場ニ関スル件

京都西本願寺ヨリ当浦潮ニ派出セル浦潮本願寺布教所主任太田覚眠ナルモノ本月四日小官ヲ来訪シ当地在留朝鮮人ニ仏教ヲ弘メムコトヲ希望シ朝鮮人ヲ集ムルノ手始メトシテ同寺附近ノ土地ニ授産工場ヲ開設セムト欲スルノ計画ヲ縷述シ本件ハ本年六月寺内統監及石塚総務長官ニ具申シ置キシカ…^⑤

この報告書から分かるように、太田の布教活動の対象には朝鮮族が入っていた。しかしこうした異民族への布教活動が、太田個人の発想から出てきたのだろうか。特に最後の一文が気になるところである。

ここに言う寺内とは朝鮮総督府の寺内正毅であろうし、石塚も同じく石塚英蔵であろう。この文からすればウラジオ総領事に話を持って行く前に、既に太田は寺内や石塚などの朝鮮総督府側との件に関して合意していたことになる。しかし一介の僧侶である太田が、高官である寺内や石塚に簡単に会える訳でもないだろう。そうなれば太田と寺内や石

塚は、何かの手蔓で結びあっていたものと思われる。それに朝鮮総督府にもこうした発想があつたから、寺内や石塚は太田に会つたし、太田は外務省官僚である総領事の頭を飛び越えて彼等と合意することができたのであろう。

実際に総領事大島富太郎は太田の案に反対であつた。ウラジオの朝鮮族は排日意識が強いこと、そのために「職工募集ハ極メテ困難ト認メル」と記している。大島の反対のせいかどうかは分らないが、後の外務省記録の中に授産工場に関する記述が出てこないことや、太田の伝記などにもこうした活動が記されていないことから、これは実現しなかつたようである。

幾つかの太田の評伝には、太田が郡司成忠海軍大尉と親密な関係にあつたことが記されている。郡司は幸田露伴の兄であり、露伴はロシア文化の専門家であつたから、ロシア語あるいはロシア文化ということでは郡司とつながりを持つたかもしれない。詳しいことは分らないが、太田のシベリアにおける活動の様々な側面に郡司がいた¹²⁾。

それだけではない。一九三三年に、太田は長年のシベリアでの活動について天皇杯を下賜されるが、この時の祝賀の式典に多数の軍高官が祝電を寄せていて、これについて前掲「秀トシコリ」は「軍の中枢部に影響力のある、怪僧、太田覚眠の一面を窺かせる。」と評している。

太田はどこでこうした軍部との関係を作つたのだろうか。前掲太田宏宣によれば、太田覚眠はウラジオへ行く前に、郷里の四日市から「上京

アジアにおける日本宗教教団の活動とその異民族教育に関する覚書

して八百屋小僧、或いは政治家の書生となつて露語の勉強にいそしんだということである。」という。しかし前掲水谷英三と『近代仏教界の人間像』¹³⁾は、東京外国語学校でロシア語を学んだとしている。加藤九祚は東京外国語学校にロシア語別科があり、その第一学年に八杉貞利、荒木貞夫とともに太田覚眠の名前が見られるという¹⁴⁾。もし東京外国語学校在学したとするならば、ここで軍との関係が生まれたことは推測できる。その理由は当時の東京外国語学校のロシア語科には、陸軍参謀本部委託生が数多く在席していて、軍部との関係が濃厚であつたからである。

荒木貞夫がロシア語別科に在席していたのかどうか、在席していたとすればどのような形で在席していたのか、現在のところ確認がとれていない。また加藤の言うように在席していたとすれば太田覚眠とどのような関係があつたのか、これも定かではない。しかし例えば、後にハルピン学院を設立し、一方で諜報活動をしていたとも言われる清水三三などは、東京外国語学校ロシア語科に在席していたことから、生涯にわたり軍との繋がりを続けた一人であつて、これからも推測できよう。

太田の行動には、細かく見て行けばいろいろな疑問がある。先に書いたエピソードにしても、「路傍の乞食」になぜ布施をしたのだろうか。布施は僧侶がもらうものではなかったのか。「浦潮本願寺」は本山から多額の援助をもらつてはいなかった。それなのに「路傍の乞食」に長年布施しようとするその額は少なくなかつたはずであるから、その金の出所はどこであつたのか。太田はロシア語が上手ではないと自分では言つて

いたが、ではその太田がウラジオの日本人界を離れて、シベリア各地は言うに及ばず、モスクワまで何を目的に出かけたのか。そうした疑問の一つが太田の蒙古行きである。

太田は突如、一九三六年に蒙古の莫力廟へ出かける。前掲吉村貫練によれば、もと蒙古の活仏であったアウン・クワタンの説得に応じて、「蒙古人（ラマ僧）の開發と彼等身心両面の救済が達し得らるれば」と入蒙したという。蒙古の莫力廟では施薬所と日本語学校を経営したと言われるが、詳細は分らない。しかし「秀トンコリ」の調査によれば、周辺の蒙古人から尊敬を受け、一九四四年に死亡していたのにもかかわらず、調査の当時に（一九八二？）なお太田を知る人は多かったという。

太田と軍部との結び付きの内容は明らかではない。しかしおそらくその結び付きが無ければ、七一歳の老人になってまで、しかもそれまでのシベリア布教とは全く関係の無い蒙古に布教に出かけ、客死するということは有り得なかっただろう。それでも世に言われるように太田がスパイ（諜報員）であったかという点、当時数多くいた情報収集のためのスパイとは意味が違おう。むしろ太田のアジアへの思い、日本海対岸への思いと、軍部のアジア政策とが一部で重なったためであろう。太田のように国土、右翼、アジア主義者など多様な呼び方をされる人々を、スパイという荒いことばで切り捨ててしまっただけは本質を理解することではないだろう。日本海対岸への思いは現在の日本人にも濃厚に残っているのだから、こうした人々を丁寧な心に心のひだにまで入って理解する

ことが、これからのアジアとの関係を構築する上で必要である。しかし日本の教団の布教活動と軍部との結び付きは、相当に奥深いものがある。

二、曹洞宗の異民族への布教・教育活動

1 曹洞宗の満洲開教

『曹洞宗海外開教伝道史』¹⁵によれば、曹洞宗は、間島別院や新京別院を含めて、日中戦争下の満洲に五九ヶ寺を持っていた。この五九ヶ寺の特色は、まず第一に、大部分が満鉄沿線付属地の地方都市に置かれていて、その布教活動の対象は在留邦人にあつたと思われる点である。第二に、真光寺（北安省綏化）、北安布教所（北安省北安市）、双龍開拓団布教所などのように、主として日本の開拓民を対象としたものが多い点である。第三に、間島別院（間島省龍井村）、日満寺（通化省）、梅河口布教所（四平省海龍）、図們布教所（間島省図們）、土門子布教所（間島省琿春）などのように、住民の大多数が朝鮮族である地域に寺院が設立されている点である。こうした布教の傾向は他の宗派、例えば西本願寺や浄土宗の布教活動と同じような部分が多いのだが、しかし第三の点では、曹洞宗は異なつた志向を持っていたと言えよう。

朝鮮族居住地域に寺院が設置されたことは、朝鮮族への布教の可能性を意識していたことを意味していた。しかしだからと言ってすべてが朝鮮族を対象とした寺院とは言えず、こうした地域にありながら結果とし

て多くの場合在留邦人を相手としていたと思われる。

一九三五年の図們布教所では、信者が、男五五人、女二五人の総計八〇人であったという¹⁸⁾。当時の図們にはもっと多くの日本人がいたから、日本人のごく一部を吸収できただけで、それ以上に朝鮮族を集めることができなかったというのがこの数字の示すところであろう。しかしそれでもなお曹洞宗は朝鮮族を意識していたと見るべきである。それは間島別院に付設された、間島星華女学校の存在から言えることである。

2 間島在住朝鮮族の教育

間島星華女学校は一九二四年に、貧困な朝鮮族婦女子のための女子夜学会として創設された。一九三〇年六月以後は昼間制に転じて、名前も間島星華女学校となる。学校は六年制の初等教育学校であった。規模としては一九三五年の段階では¹⁹⁾、教員は校長谷洞水以下、日本人教員二人、朝鮮族教員四人、生徒は一九三四年度には一三六六から一六六六人が在席した。教科目としては修身、国語（日本語）、国作（日本語作文）、朝鮮語、朝鮮語作文、算術、書き方、図画、体操、唱歌、珠算、地理、国史（日本史）、理科、裁縫、手芸で、課外科目として家事、衛生、仏教大意が置かれていた。

本校は、満洲国時代の朝鮮族初等教育学校としては、満鉄付属地の普通学校系統の学校を除けば、それなりの規模を持つ学校と評価できるものであった。またその内容についても、間島省及びその近傍の学校の中

アジアにおける日本宗教教団の活動とその異民族教育に関する覚書

では、朝鮮総督府や欧米系ミッションの支援を受けていた学校を除けば、充実したものと言えよう。では、その星華女学校がどのように設立されたか見てみよう。

曹洞宗における海外開教（布教）としては、台湾開教、朝鮮開教に比べると満洲開教は出発が遅れ、明治四〇年代からであった。また他の宗派の満洲開教が日露戦争中、あるいはその直後から始まっているのを見ても、曹洞宗は一步出遅れの観があった。

宗務庁予算として満洲開教費が計上された記録としては、一九一二年（大正元年）に四一、二四四、五四銭、一九一五年度（大正四年）に一四、二七四、四〇銭の記録が曹洞宗「宗報」にある。また同じく「宗報」に、一九一六年（大正五年）に満洲布教所建設費補助金二千円の支出が決められたと記してある。間島別院は一九二三年（大正一二年）の設立であるが、一九二〇年（大正九年）三月に安藤澤成が、星華学校のあった間島龍井駐在の布教師として任命されたとの記録もある²⁰⁾。このことから考えると一九二〇年前後に、大連、本溪湖、鉄嶺、奉天といった満鉄付属地の開教に次いで、朝鮮半島国境沿いの中国領の間島の開教が始まったと言えよう。

間島は、今日では延辺朝鮮族自治州と言われるように、満洲の中でも最も多くの朝鮮族が居住する地域である。この地域では、一九一九年に起こった朝鮮三一独立運動の影響を受けて、一九年、二〇年と激しい抗日運動が起こっていた。日本側は、朝鮮総督府や外務省を含めて、抗日

運動対策に焦りの色を濃くしていた。一九二〇年十月二日には朝鮮族の
一団が琿春の日本領事館を襲撃した琿春事件が起こった。それに対して
十月一四日に、中国領の間島へ国境を越えて日本軍が出撃した。日本軍
は翌年の一月に撤兵するが、この間に朝鮮族の抗日運動を徹底的に弾圧
した。しかし外国の領土に居住する朝鮮族の行動を、軍の力だけで押さ
えようとするのには無理があった。一九一〇年代後半からの抗日運動の
高まりを、朝鮮族の心を「融和」して押さえ込む必要があった。間島の
龍井駐在の布教師として安藤澤成が任命されたのは、まさにこの時であっ
た。

3 曹洞宗と朝鮮総督府

一九二四年一月に第二八次曹洞宗宗会が開かれた。その場で林財務
部長が次のような報告をしている。

ソレカラ予テアナタ方ヲ御訪問シテ陳情シテ居ラレマセウガ、浜陸
軍主計総監（陸軍主計官浜名寛祐）デスガ、其御方ガ非常ナ曹洞宗ノ
是ハ熱心ナル居士デアリマスルガ其居士ガ間島ニ新寺ヲ建立致シマ
シテ続イテ中学ヲ起シマシテ、ソレデ朝鮮総督府等カラ多大ノ援助ガ
アル趣デ、中学ヲ造ツテ鮮民ヲ教化シタイ……

林財務部長の報告によると、浜名寛祐は僧籍を持っている者である。

一九二三年に五万五千円の私財を拠って、朝鮮族を「融和」するために
間島別院を作ってくれた。今度は間島に「中学ヲ造ツテ鮮民ヲ教化シタ

イ」から、曹洞宗としても応分の援助をして欲しいというのである。

五万五千円という当時としては巨額な金を、浜名個人の私財から出せ
るものかどうか。恐らく「朝鮮総督府等カラ多大ノ援助ガアル趣デ……」
というのはこの辺の事情を踏まえての発言だろう。要するに、間島に朝
鮮族教育のための中学を作る企画を持っているが、朝鮮総督府が表面に
できることはできない。従って曹洞宗に間島別院建設という恩を売って曹
洞宗にやらせよう。それが表面は浜名の要求であり、その裏にいた総督
府の思いであったと推測される。

この結果、曹洞宗宗会は、五年間にわたって総額一百万円の補助金の支
出を決める。

ところがその後一九二八年の第三二次宗会には「間島中学林設立費補
助金中止ノ件」が提案された⁸⁾。提案理由は次ぎのとおりである。

間島中学林ハ本宗ノ篤信者元陸軍主計監浜名寛祐氏ノ發起ニ係ル間
島在住ノ鮮人教育ヲ目的トシテ企画サレタルモノニシテ大正十四年度
ヨリ五ヶ年賦ヲ以テ支出スヘキ補助金中其第二年度迄支出シタルモ其
後事業ノ成績予期ニ副ハス遂ニ半途中止スルノ止ムナキニ至レリ

この時期には同じ間島龍井で、後述する日高丙子郎の経営する光明会
の手で、朝鮮族子弟を対象とする永信中学校の事業が展開していたから、
あるいはそちらと競合したために曹洞宗中学林の設立が旨く行かなかつ
たのかもしれない。台湾では曹洞宗中学林は一応設立されるが、満洲間
島ではこうして中止になる。

ところでこの計画はここで終わったわけではない。「中止ノ件」の説明は続く。

而シテ既ニ支出シタル金額ハ仮教室ノ建築費ニ充當シ目下間島別院ニ於テ鮮人夜学会ニ使用シ居レリ

浜名の企画は中止になったが、今度は曹洞宗間島別院の企画による「鮮人夜学会」を推進しようというのである。ここに言う「鮮人夜学会」とは先に述べた間島星華女学校の前身の女子夜学会のことである。そして間島星華女学校の経営については、前掲の「昭和九年度 報告書」は次ぎのように書いている。

間島別院開基浜名寛祐閣下ヨリ間島別院へ寄付サレシ基本金参万円ヨリ湧ク年利貳千壹百円ノ中参百円ヲシテ本校ノ根本資金トナシ此ノ外別ニ昭和貳年度ヨリ曹洞宗務院教學部ヨリ毎年度参百円内外ノ補助ヲ受ケ更ラニ昭和八年度ヨリ外務省ノ多大ノ御同情ニ依リ年度金六百円ノ補助ヲ蒙リ又昭和九年限特ニ朝鮮總督府ヨリ参百六拾円ノ補助金下附ノ恩典ニ浴シ：

浜名の中学林建設の企画は挫折したが、浜名の資金が星華女学校を支えることになる。さらにそれを外務省や総督府が支え、曹洞宗はその一部を支出することになった。こうして浜名の企画は、曹洞宗の名前を借りて別の形で実現したのである。

4 樋口芝巖と朝鮮族教育

アジアにおける日本宗教教団の活動とその異民族教育に関する覚書

この女子夜学会を実際に企画し、推進したのは、二三年に曹洞宗から間島別院の院主兼布教師に任じられた樋口芝巖であった。樋口は一八七九年（明治一二年）に愛知県に生れ、曹洞宗第八中学林で修学し、さらに曹洞宗大学林を卒業する。一九一七年から二〇年にかけて「兩大本山布教師」という曹洞宗として大変名誉な職務につき、二一年から大本山永平寺単頭に任ぜられた。樋口はこうした優れた経歴を持つ僧侶であった²¹。

間島では、間島星華女学校を経営するとともに、日曜童話会、間島健児団、仏教婦人会を組織し、「揭示伝道」、「職業紹介」、「貧民救済」の布教活動をし、がり版刷りの伝道誌「観世音」を発行するというように、活発な布教活動を展開した。一九三四年（昭和九年）に間島別院を辞任するが、帰国後には自坊の愛知県豊田市にある龍溪院に戻り、布教とともに地域の社会教育活動を積極的に行った。一九七二年（昭和四七年）に九三才で死去するが、誠実な宗教者として生涯を過ごした人と言うことができるだろう。

その樋口が朝鮮族教育にどのような思いを抱いていたかについては、樋口が朝鮮族教育について直接思いを書いた月刊誌「観世音」が現在見られない²² ために詳しいことが分からない。しかし前掲「昭和九年度報告書」には、次ぎのような「本校ノ目的」が掲げられている。

本校ハ朝鮮婦女子ノ為メニ初等教育ヲ授クルヲ以テ目的トナセドモ一方日本仏教ノ精神ニ基キ信仰ヲ主体トスル精神教育ヲ施シ卒業後ハ

一家ノ主婦トシ良妻且賢母ナルハ勿論日本婦人タルノ面目ヲ維持セシムルヲ主眼トス

この「昭和九年度 報告書」は外務省へ学校の状況を報告するために書かれたものであるから、外務省の意向に反することは書けない。そのことを割引しても、本校教育の目的として朝鮮婦人を日本婦人とすることを唱えたことは、「良妻賢母」を掲げたこと以上に目立つ点である。また「昭和九年度卒業修業証書授与式」では、「勅語奉読」はあっても「回鑾訓民詔書」の奉読や、新京の宮城遥拝といった満洲国の教育機関では普通に行われていた式次第がなかった。間島にあった本校は、本来は満洲国の教育機関であるから、行事は満洲国式に行うべきであるが、これはまさに日本式である。このことから樋口は間島朝鮮族を日本人として扱おうと考えていたことが分かる。

前掲仲彰一には、樋口が「日鮮同裔を立証する『著書刊行』」したとの一行が入っている。おそらくこうした意識も樋口にはあったと思われる。こうした点を含めて樋口の教育意識は、朝鮮総督府あるいは軍部の主張に近いものであっただろう。

5 その後の間島星華女学校

一九三四年（昭和九年）十二月二日に樋口が辞任すると、翌年一月十九日に谷洞水が新校長として赴任してくる。

谷洞水は一八九一年（明治二四年）十月十二日に山口県で生れている。

曹洞宗第四中学林を卒業し、次いで曹洞宗大学高等部へ進学する。その後山口県桂光院住職となつて、昭和十年に間島へ来る。谷が日本の敗戦まで間島別院にいて校長をしていたのかどうかは不明である。しかしそれなりの功績があつたことを認められたのであろう、昭和二年に緋の衣を貰っている。これは僧侶として特別なことである。²³

こうした経歴は樋口とほぼ似たところがある。しかし朝鮮族教育についてどのような考えを持っていたのかについては、桂光院にもほとんど資料が残っていないとのことで、今のところは良く分からない。ただ樋口の後を継いだということで、樋口と大きな違いはないだろう。

間島の教育は満洲国時代まで主として私立学校が背負っていた。特に中等教育は、龍井にあった光明、恩真、明信、東興、大成の五つの私立学校が朝鮮族教育の中心であつた。それが一九四〇年前後から学校の整理が始まり、満洲国の公立教育体系に組み込まれるようになる。本校もこうした当時の満洲国間島省の教育制度改革に従つて、一九四四年三月に「協蔭女子師範科」に変わる。この「協蔭女子師範科」なるものがどのような教育をしたのか、どのような組織を持っていたのか現在のところ不明であるが、明信女子中学校の後進である龍井女子国民学校とともに間島省の女子教育の中心に位置付けられようとしていたことは間違いないだろう。²⁴

しかし一九四五年八月の日本の敗戦に伴つて、同校は自然に廃校となつたと推測される。

三、浄土宗と異民族への教育活動

浄土宗が満洲で、異民族への布教と教育にかかわったのはいつだったのだろうか。

『浄土宗 海外開教のあゆみ』²³によれば、朝鮮や台湾への開教は日露戦争以前に始まっていた。それにもかかわらず満洲への開教は、日露戦争後であつたという。しかもその開教活動の中で異民族教育を始めたのはもっと遅かつた。同書に記録されているものとしては、一九〇五年（明治三十八年）十一月に、遼陽教会所が夜学校を設けて中国人に日本語を教授をしたのが最初である。ただこれがいつまで続いたのか、それに関する記録は今のところ見つからない。

異民族教育の問題を中国大陸まで広げて調べてみると、一九〇五年九月に天津に渡った峯旗良充が、陸軍経営の天津普通学堂を、浄土宗の事業として受け継いだことが書かれている。このことを他の資料で確かめてみよう。

『浄土教報』第六六七号²⁴には「峯旗渡清僧消息」という記事があり、峯旗が天津へ行ったこと、学校を訪問したことが書いてある。この記事によれば峯旗は浄土宗の僧侶として中国へ渡っているから、峯旗の天津行きは浄土宗の意志によつた行動と見るのが自然だろう。

外務省記録に「天津租界局理事ヨリ入手」と添え書きされた、大正七年七月一六日付けの「共立学校」と題する書類がある²⁵。これに拠ると、

アジアにおける日本宗教教団の活動とその異民族教育に関する覚書

義和団事件の発生にともなつて一九〇〇年六月に日本軍は連合軍と共に天津を占領する。この時に日本軍憲兵大尉隈元実道が、在住の中国人等に金を拠出させて、日出学館という学校を作つた。同校在席の学生は初年度の一九〇〇年（明治三十三年）に八〇名、最も多かつた一九一四年（大正三年）には一〇六名と記録されている。この学校の主たる目的は日本語教育ではあつたが、カリキュラムを見ると「支那文、修身、作文、歴史、習字、理科、地理、算術、体操、図画、日本語、英語」等となつていて、それだけから見ると通常の学校に近いものがあつた。教員には「常駐屯軍将校下士軍属等之ニ当リ其経費亦駐屯軍ニ在テ支持シ来リシ」という。まさに軍の経営学校であつた。

ところがその後には次ぎのようなことが書いてある。

「明治三十九年五月遂ニ学館ノ経営ヲ個人ニ委ネ以テ駐屯軍ノ保護ヲ解除セリ此ニ於テ当時ノ校長峯旗良充ハ租界董事ニ相計リ館名ヲ改メテ天津高等学堂ト為シ……」

この記述から、峯旗がこの軍が経営する学校で校長をしていたことが分かる。しかし峯旗はこの学校が軍の経営を離れるとすぐに辞職して、その後は大木靈道（朝鮮開教師）が経営に当たる。しかし「宗報」²⁶によれば、その経営も旨く行かず、間もなく浄土宗の手を離れて西本願寺の経営に移つたという。

辞職した峯旗はすぐに北京へ向かう。北京では蒙古語やチベット語を学習することが目的であつたという。そしてその学習のねらいは蒙古へ

行くことにあつた²⁹。なぜ蒙古へ行こうとしたのか細かい事情は分らないが、同じ「浄土教報」には「西藏(チベット)の達頼喇嘛(ダライ・ラマ)を動かして日本と握手せしめんとした」という解説が載っている³⁰。

なぜ蒙古へ行き、ダライ・ラマに会おうとしたのか。太田覚眠も同じように蒙古へ行つたのであるが、こうした二人の行動はそれまでの彼等の行動の流れからすれば、余りにも唐突な感じがする。やはり峯旗個人の都合や発想から蒙古行きを考えたのではないように思われる。むしろこうした行動には、太田覚眠や黒龍会系の人々、大陸横断を試みた軍人たちと同じような匂いを感じる。一見個人的な行動のようでいて、その実どこか政治的な目標を抱えていたのではないか。

「渡清」以後の峯旗の行動は、外側から見ていると全く脈絡が無いように見える。天津から北京へ行つた峯旗は、今度はさらに北の吉林へ行くことになる。「浄土教報」はその理由を、曹広楨という蒙古人に気に入られて、吉林提学使となつたからと説明している。また吉林に行つてからは吉林師範学堂教習を兼務したという³¹。

外務省記録にある「清国傭聘本邦人名表」³²によれば、峯旗は一九一〇年(明治四十三年)に吉林で中国側と教習として契約したことになる。契約期間は一年間である。職名は両級師範学堂教習、教育研究会講師、法政学堂教習で、仕事の内容は教育学、理科、数学、日本語と記されている。一九一二年(大正元年)の版の「清国傭聘本邦人名表」によると、職名は師範学堂教習、教育会講師兼教育事務嘱託(教育行政事

務)と、一部であるが変更されている。契約した時については一九一〇年二月とあつて同じであるが、契約期間は、こんどは「無期限」となっている。「無期限」という契約は、雇用期限のあつた当時の中国在留の多くの日本人教習と比べると、破格の待遇であつた。峯旗は、おそらくそれだけの信頼を受けていたのだろうし、力のある人物であつたと思われる。同じ時期に吉林農業学堂の教習であつた加知貞一郎や、吉林女子師範学堂の教習であつた峯旗の妻の峯旗操子も「無期限」の契約をしているが、当時の教習の中には中国側とこうした良好な関係を結ぶ人達もいたのである。

一九三三年(昭和八年)の「浄土教報」第一九八五号は、峯旗を「元吉林省教育顧問、満洲国民間経済団体補導役」³³と紹介している。

一九四三年(昭和十八年)版の「大衆人事録」³⁴には、「日本満洲セメント(株)取締役 満洲洋灰有限公司 吉林市大馬路一七九：京都府天充長男明治十四年四月十八日生る同卅八年天津高等学堂校長拝命吉林省教育顧問満鉄嘱託歴任著書に『満洲民族史』『吉林省の産業』『吉会鉄道の水田候補地』とある。

著書としては、この他に現在見られるものとして『吉林省開発と豆満自由港』³⁵がある。こうした記述から見ると、かつての宗教人としての峯旗ではなく、中国通の産業人としての姿が浮かび上がる。

一九四三年(昭和十八年)三月号の浄土宗「宗報」³⁶には、「峯旗氏追悼会」の記事があつて次ぎのように記している。

本宗教師で大陸在住三十余年、日華両国の精神的結合に力め、官民の信頼深く隠然たる勢力を持つて居た峯旗良充氏は、今春北京の寓居で客死された。……去る二月十六日午後二時から神林周道氏等の発起に依り東京芝妙定院で林大僧正を導師とし厳肅なる法要が営まれ里見宗務長の挨拶、水野梅曉氏、林大僧正の追懷談、神林氏の謝辞等があった。……

「官民の信頼深く隠然たる勢力を持つて居た」とは何を意味するのだろうか。単なる宗教人や産業人というより、他にもう一つ別の姿があるように思える。

曹洞宗の水野梅曉は、かつて南中国で布教に従事したが、外務省記録によれば⁵⁵信者は一人もいなかったという。それでいながら中国各地を旅行して、現地の領事館は水野の意図に不審な目を向けている。こうした水野と峯旗は、どのような繋がりを持つていたのだろうか。

一介の僧侶である太田や水野は、外務省の出先機関の監視を受けるほどの力をどこから手に入れたのだろうか。外務省の手が届かない部分があるとするれば、やはり軍部ではないだろうか。峯旗についても、はっきりとした証拠は無いが、前述のように軍部との関係を感じさせるものがある。

四、光明会と日高丙子郎

1 間島における日高丙子郎

アジアにおける日本宗教教団の活動とその異民族教育に関する覚書

日高については既に一文を報告している⁵⁶。ここではまず日高の仕事とその意味について、要点だけを述べておく。

中国延辺朝鮮族自治州の一部はかつて間島と呼ばれていた地域で、十九世紀後半から多くの朝鮮族移民が朝鮮半島から渡ってきたところである。一九一〇年に日本は朝鮮半島を併合したが、間島は抗日運動の震源地と呼ばれたように、朝鮮族移民の抗日運動はしばしば朝鮮植民地の支配を揺るがす原因になった。そのために間島朝鮮族だけではなく、満洲朝鮮族全体をいかに押さえ、いかに「融和」するかは日本の植民地政策上の重大な課題であった。

間島朝鮮族の運動を押さえようと、朝鮮総督府は中国側に在留朝鮮人の取締を要求したり、あるいは領事館警察を使って取り締まりをする等の強攻策を取ることが多かった。その一方で、朝鮮族学校を建てたり、朝鮮族の私立学校に資金を供給するなどして、日本の支配を受け入れる朝鮮族を育てようとしていた。

こうした政策はシベリア在留の朝鮮族に対しても同様に行われた。しかし結局のところ一九一〇年代にはこうした政策は効果をあげなかった。そのために一九二〇年に琿春にあった日本領事館を一团の朝鮮族が襲う琿春事件が起ったが、その時には日本軍を直接に中国領土内に送り込む「間島出兵」という粗雑な行動を取らざるを得なかった。

この他にも朝鮮総督府は朝鮮族の様々な「融和」政策を試みていた。その一つとして韓国駐劄軍司令官長谷川好道は、日高に機密費を与えて

「融和」活動をさせた。長谷川だけでなく寺内正毅、斎藤実の二人の朝鮮総督も日高に多額の機密費や私金を与えた。それを受けて日高は間島で鉱山を経営したり、商店を営んだり、朝鮮族の宗教教団の長になったりしたが、思ったほどには成果が上がらず、相変わらず抗日の雰囲気は強いものがあつた。

日高が「融和」策の一つとして光明会設立の企画をしたのは、一九二〇年頃であつたという。最初の光明会の活動は光明学園を作ることであつた。これは朝鮮族の苦学生のための寄宿舎であつた。光明会はこの他に順次、女学校や幼稚園、修養団や青年会、児童会を作つていった。その活動は仏教教団の布教活動や慈善事業に近いものがあつた。

光明会活動の一つの転機は永新学校を買収したことであつた。永新学校は当時、間島龍井村にあつた朝鮮人中等学校で、抗日学校としても有名であつた。しかし経費が不足していて経営に大変苦勞していた。これに対して日高は朝鮮総督府や外務省から高額な資金を引き出して、永新学校の買収費や運営費に当てた。こうして永新中学校は日高のものになったものの、その運営は必ずしも順調ではなかつた。しかし満洲国期には、間島朝鮮族の中等教育機関の中心的存在になつて行つた。

一九三八年に日高は光明会の理事長を退くが、今度は満洲国の元の総理であつた鄭孝胥と共に、新京（長春）に王道書院^⑧を作る。王道書院は満洲国国民の精神的な支柱を生み出すことを目的としていた。朝鮮族の精神改造を目指していた日高は、今度は満洲国国民の精神改造を考え

たのである。しかし日本の敗戦を迎えたために、日高の目論見が実現することは無かつた。

教え子たちは光明会が高度な教育を施したという意味で日高を高く評価した。しかしその一方で朝鮮総督府との関係を薄々ながら感じていて、大変複雑な思いで日高を見ていた。

敗戦の混乱はこうした日高をそのままにしては置かなかつた。敗戦後、日高の教え子や関係者の間には、日高は長春で暴徒に襲われて撲殺されたという噂が広がつた。事実、鄭孝胥公邸から消えた日高は、二度と人前に姿を現さなかつた。

2 日高丙子郎と宗教教団

イ、光明会

朝鮮族に対する活動団体の名前を、日高はなぜ光明会と付けたのだろ
うか。

実は日高は浄土宗「光明会」^⑨の山崎弁栄（べんね）上人（光明会では弁栄聖者と特別な尊称を付けて呼ぶ。）に帰依していた。日高の思い出によれば^⑩、一九一九年（大正八年）二月三日に知人の誘いを受けて、神奈川県の当麻無量光寺に弁栄上人を訪ね、上人の念仏と人柄に打たれて入信したという。前述したとおり、日高が間島で光明会を設立しようと企画したのは一九二〇年頃であつたと言われるが、まさに入信の直後であつた。日高は間島に光明主義の楽園を作ろうと考えたのである。

山崎弁榮は一九一七年に朝鮮と満洲へ伝道に出かけるが、直接にアジアについての言説はなかったようである。しかし弟子の中には次ぎのような発言をするものがいた。

聖者の雄図は、その教徒の手によつて幾代かけても成就せざるべからず。而してその第一歩は伝道の統制なり、そがためにはその中心聖地を建設せざるべからざるは言論の余地なき所とす。然らばその中心聖地はいづこに？ いづれに選ふべきか、余は聖意をかしこみて満洲なりと断言するものなり。⁹

この発言は日高の活動を前提にしてのものであつたと思われるが、日高自身もこうした意識で間島に光明会を設立しようとしていたのではないだろうか。日高は光明会の機関紙「観照」やその他に、幾つか山崎弁榮の思い出などを書いているが、こうしたところからも日高の光明会への思い入れが読み取れる。しかし同時にそれは光明主義へのあこがれと、日本海対岸へのあこがれと、日本の軍勢力、近代的な力への自信をひとまとめにするものでもあつた。

ロ、臨済宗

しかし日高と宗教との関係はこれだけではない。

日高は彦岐の生れであるが、まだ十代のうちに京都に移る。外務省記録に残る日高の履歴書¹⁰によれば、この時に京都の禅宗系の紫野中学に入ったという。彦岐には臨済宗と曹洞宗の寺院があるから、おそらくそ

アジアにおける日本宗教教団の活動とその異民族教育に関する覚書

の縁で禅宗系の紫野中学に入ったのであろう。紫野中学は禅門高等学院とともに京都の大徳寺にあつて、臨済宗の僧侶養成を目的としていた。日高はここで正式に禅を学んだと思われるが、同時に臨済宗系統の人脈を築いたようである。

後の事になるが斉藤実内閣の時代（一九三二・五・二六―一九三四・七・八）に日高は様々な満洲国工作をするために、間島からどつて日本に在留することが多かつた。その時に逗留したのが方広寺、妙心寺、伊豆の龍沢寺など臨済宗の寺々であつた。これもそうした人脈の結果であらう。

一九三二年十月三十一日付けで、京都花園妙心寺東海庵から出している斉藤実総理大臣宛ての書簡¹¹に、「満洲国精神問題に対する愚案」として日高は次ぎのように書いている。

……仏教の高徳を迎ふる事に御座候 即ち満洲国を道の 国として育て上ぐる根本道場の礎石を置き 執政国務総理始め要人に王道の大本たる天 道無私の心境を自得して貰ひ……

ここには満洲国の精神を作り上げる対策（裏工作）について、苦勞している日高の姿が描かれている。満洲国の精神を作るには「仏教の高徳」の僧侶を満洲国に送り込むことが望ましいと思われるが、「適当な老宿」がいなくて「殆どサジを投げ候」状態であつた。しかし最近になってようやく見込みが出てきて、「只今禅宗本山当局特に満鮮布教に経験深き方々に協議仕居候」と伝えている。

日高にとって、満洲国の精神問題を解決するには、まずは光明会、ということではなかった。そしてその相談の相手も「禪宗本山当局」であり、そしてようやく引つ張り出した「仏教の高徳」も、臨済宗の山本玄峰^④であつた。ここにも日高の臨済宗人脈が生きている。

ハ、日本国教 大道社

実は日高に関係のある宗教がもう一つある。神儒仏三道を合流させた^⑤と称していた「日本国教大道社」という神道系統のグループである。大道社は一八八八年（明治二十一年）一月に設立されたもので、山岡鐵太郎（鐵舟）、鳥尾小弥太（得庵）、本庄宗武が発起人であつた。しかし実務は川合清丸が取り仕切り、世間からは川合清丸の大道社と思われていた。事実一九一七年（大正六年）六月に川合が死ぬと、「後継適任者無き為」に大道社は解散されることになった^⑥。

日高は一八九五年（明治二十八年）に入社し、一九〇四年より約二年間、大道社の雑誌「日本国教大道叢誌」の編集兼発行人になった。大道社は前掲大浦貫道によれば一時会員が約三万五千人になり（中外日報）には一万八千とある）、「国家主義者の中心勢力たるの観があつた」^⑦という。

なぜ日高が大道社に入社したか。その経緯ははっきりしないが、おそらく禅を通じて山岡鐵舟や鳥尾小弥太と知り合つて、その手引きで入社したのではないかと思われる。

前掲大浦貫道によれば、日高は岩岐にいた時代から「大道叢誌」を愛

読していたというが、確かめようもない。

しかし日高がどこまでこの大道社に心を寄せていたかは分からない。大道社の中心であつた川合は日高に大きな期待をかけていたが、一九〇六年（明治三十九年）一月、川合には何の相談もなく突然に日高は満洲へ出奔してしまう^⑧。おそらく日高は川合の説く大道社の理念よりも、鳥尾小弥太の方に心酔していたためと思われる。一九〇五年（明治三十八年）五月に鳥尾が死ぬが、こうしたことが満洲への出奔の決意をさせたかもしれない。

『川合清丸全集』を見ると、川合にはアジアに関する発言がほとんど無いことに気付く。まして間島については何も語っていない。これでは大道社の社員の中から多くのアジア関係者を出てきた理由が判然としない。これに対して鳥尾小弥太は初代参謀総長（第六局長）を勤めたこともあつて、アジアに関する発言がかなり多い^⑨。その中でも日高に大きな影響を与えたのは鳥尾の『神武太平策』^⑩である。

一九三五年（昭和十年）に真崎甚三郎大将に宛てた日高の書簡がある^⑪。それは次のような内容であつた。

肅啓上

参謀総長宮殿下には 先師生前親謁、忠志ハ御高諒賜ハリ候御事と奉存候 閣下の御高配に依り 先師の遺忠桂総理書面等 上覧戴き候えバ末弟子報恩之れに加ふるもの無之と奉存候 切に御願仕候 謹白

この日高の書簡には、鳥尾が起草した『神武太平策』の結論部分が転

記されていて、手紙の内容は「参謀総長宮殿下」にそれを見せて欲しいとの依頼文である。『神武太平策』はまだ日露の戦いが進行している一九〇四年（明治三十七年）、当時の桂総理大臣にも送られたが、それに対する桂の書簡の写しも入っている。これは真崎に対して是非とも参謀総長に『神武太平策』を見せて欲しいという日高の強い思いの現れである。

先師とは鳥尾のことである。『神武太平策』には、間島に東洋のスイスを建設して道徳力の堅固な国を建てれば、アジアの太平の基礎ができるし、これは日本人の任務である、とある。この『神武太平策』を「参謀総長宮殿下」に（戴仁親王 一九三一―一九四〇）に見せてくれるように依頼したのは、混乱している満洲国の状況を憂えて、今こそ鳥尾の『神武太平策』が生きると考えたからである。真崎への他の書簡にもそうした日高の思いがあふれている。そして「末弟子報恩之れに加ふるもの無之」とは、鳥尾への心酔振りを示している。また間島にける日高の意図を明らかにしている。

ここで日高の光明会への信仰と、鳥尾のアジアへの策、『神武太平策』が結び付く。この信仰と策は、一九〇六年に間島へ出奔した時に日高を突き動かしたものであった。

二、軍部と日高丙子郎

間島への出奔に当たって日高を支えた人々がいる。それは陸軍参謀本部を中心とした若手将校たちであった。大浦貫道は大道社の「大道叢誌」

アジアにおける日本宗教教団の活動とその異民族教育に関する覚書

について次ぎのようなエピソードを紹介している。

「この雑誌は陸軍の将校に愛読され、後年大將になった荒木貞夫、真崎甚三郎、林銑十郎の諸公は貧乏少尉で日高副主筆を訪問して来ては、禪を聞き儒を知ること努めたのであった。」⁹⁾という。このエピソードは日高と陸軍将校の結び付きを、また、引いては朝鮮總督府の上級将校との関係が生まれた筋道を語ってくれる。

出奔後の一九〇六年二月に、まず日高は日露戦争下の中国東北地区へ出かけ、鉄嶺軍政署に高等官待遇、尉官相当として勤務する。軍務について全く経験のない日高に対して、いきなり尉官相当とは破格の待遇ではないだろうか。まさに軍の中樞部との関係がなければ考えられないことである。

日露戦争下の軍政署とは、直接にロシア軍と戦闘をする部署ではなく、日本軍が占領した地域の管理をする所である。管理といっても道路や橋梁の建設、病院や学校の設置など一般の行政府と変わらない。いうならば占領地・植民地の事前工作と言っても良いだろう。そこで日高は、おそらく植民地施策の在り方、方法を学んだのではないだろうか。そして一九〇七年九月になると間島の天宝山で、銅山主任として登場する。こうして日高の間島朝鮮族対策が始まるのである。

おわりに

満洲における教団の教育活動には、多くの場合軍部の影がある。宗教

関係者は宗教の理念に従つて布教活動に従事するのだが、同時にその活動は社会の活動であるから、社会の他の部分の活動と結び付くことになる。そのことは当然のことであり、他の社会活動と結び付いて始めてそれは社会における宗教活動の意味が生まれる。むしろ大切なことは、宗教教団が宗教教団だけで独自に活動を展開する事はある得ないということとを認識することではないか。

本論では満洲における宗教教団の教育活動の影に、常に軍部の活動があつたことを指摘した。だからといってそれだけで宗教教団の活動を悪く言うつもりはない。教団の活動をもつと丹念に見ることによって、むしろその中からいろいろなものを学ぶことができると思っている。

本論はまだ中間報告である。だから覚書きとしたのである。まだ調べなければならぬことがたくさんある。その一つが軍部の人達のアジア認識である。軍部を支えた若手将校は、良質かどうかは分からないが、優秀な人々であつた。しっかりとした伝統的な教育を受けていたし、新しい知識に対する欲求には激しいものがあつた。その人々のアジアに対する認識はどのようなものであつたか。またなぜ日韓併合に走り、日中戦争を戦つたのか。その辺りを明らかにしなければ、宗教教団の活動の意味が分からないだろう。

誤解を恐れずに言えば、今日二一世紀に生きようとしている私たちが、二十世紀前半に生きた人々の活動を批判する権利も、能力も無いのではないか。二十世紀前半に生きた人々は私たちよりも能力や知識が劣つて

いたとは思われない。その人々が最善を尽くして行動した結果が日中戦争という大失敗であり、異民族に対する差別的な行動であつたことも間違ひはない。しかしもし二一世紀に生きようとしている私たちが二十世紀前半に生きたとしたら、彼等以上の真つ当な判断ができただろうか。まずできるはずがない。

できるはずのない人が、精一杯頑張つた人を批判するのはおこがましい。自分ではできもしないことを他人に要求することは決して良い結果を生まないだろう。

まずは二十世紀前半を生きた人々の心のひだまで入り込んで、どうしてそうした判断が生まれたのか知ることが先ではないか。それなのに、ほとんど資料さえ整理できていないのに、二十世紀前半を生きた人々への批判が先行している。

今、二十世紀前半を生きた人々が自分たちの過去について口を重く閉ざしている現状をどう思うのだろうか。

差し当たつて本論では軍部の行動に対して批判するつもりはない。軍部を構成していた人々の思いが理解できないし、事実が分かつていないからである。鳥尾小弥太にしてもなぜ間島に理想郷を作ろうとしたのか、今のところ理解できていない。陸軍参謀本部をとりまく若手将校たちが、鳥尾小弥太の論作をどのように受けとつたのかも分かつていない。あけすけに言えば、鳥尾の『神武太平策』は意味のある策なのだろうか。具体的な内容は何も無いというのが私の正直な今の感想である。愚策であ

る。それを讀まれた桂太郎も、鳥尾が先輩であると言う事だから受けとつたものの、実は迷惑したのではないか。

しかしそれならなぜ日高をあれ程の活動に向かわせるエネルギー源になつたのだろうか。それを知らなければ、日高の行動が中国人や朝鮮族支配につながるなどと批判してもはじまらない。結果だけで批判する歴史研究は意味がない。その時代にそこに生きた人には結果が見えるはずもないのだから。

十九世紀以降のアジアはそれまでの世界とは違って、民族や文化が激しくぶつかった時であつた。そのために異民族に対して、異文化に対してどのように接して行けば良いのかだれも知らなかつた。だからアジアの各民族や国家も異民族や異文化に対して激しい差別感情を持つていた。いろいろな民族から支配を受けていた少数民族でも、立場が代われれば出てくる差別感情は同じであつた。

しかし日本は素早く近代的な力を手にいれたために、より激しく差別感情が生れ、周辺の異民族や異文化に対する真つ当な見方を手に入れ難くなつていった。そのために、例えば近代教育は諸民族を解放するものだという樂觀的な見方が広がり、日本はその近代教育をするのだから異民族から喜んでもらへこそすれ、嫌われるはずはないと思つていた。例えば朝鮮族の白い服は伝統的なもので近代的なものではない、だから墨をかけても良いという論理が出てくる。

こうした中でどうしたら異民族や異文化を見る目を養えたのだろうか。

アジアにおける日本宗教教団の活動とその異民族教育に関する覚書

第二次世界大戦以前と以後で、少なくとも日本人の文化的體質、教育的體質に変化は無かつた。戦後民主主義教育も戦前の天皇制教育も、異文化を見る側面においてはなんら変わりはなかつた。異文化を受け入れる體質が戦前と違いはなかつたとすれば、戦前の人々の足跡を追う事で私たちは私たちを客観化できるだろう。批判することなく知ることこそ今求められることである。

本論で利用させてもらった資料の中に、「差別文書」との汚名を浴びたものがある事は良く承知している。良く読むと確かに占領地や植民地に対する戦争前の見方を濃厚に引きずっていることが分かる。それにもかかわらず戦争前の考え方、見方をしつかり伝えてくれるし、だから今日の考え方、見方とどこが違うのかを教えてくれる。私たちは読むべきであろう。例えば間違つたものであつても、私たちの頭はすぐに悪書に影響されるほど悪くはないはずである。もつと善悪を見分ける自分の能力を信ずる必要がある。歴史の中で生まれた文書を「差別」という言い方をするのは、私たちの能力を低く見過ぎてはいないか。人間の能力に対する信頼がないのではないか。

違つた見方があればそれを論証すれば良いことで、批判や非難することではないだろう。本論に誤りがあるなら、違つた見方があるならば本論を越える良い論文を書いて欲しい。特に教育や宗教の分野であまりにも論証のない非難や批判（この場合は批判とは言わないかもしれない）が多すぎて、研究が止まつている場合を見ると残念極まり無い。

注

- (1) 神社については嵯峨井健『満洲の神社興亡史』一九九八年八月 芙蓉書房
仏教に付いては宗派ごとのものはあるが、全体を概観したものは未見である。仏教、キリスト教などを含めた戦前の資料としては民生部厚生司『宗教調査資料』康徳七年十二月、鉄道総局弘報課『満洲宗教誌』昭和五年七月など。
- (2) 中濃教篤『戦時下の仏教』講座 日本近代化と仏教一九七七年一月 国書刊行会
- (3) 木場明志『満洲国の仏教』思想二〇〇二年一月に満洲国期の仏教について概観がある。
- (4) 深川治道『天理教の日本語教育史』『天理教おやさと研究所年報』第五号 一九九九年三月
- (5) 山崎朋子『朝陽門外の虹―崇貞女学校の人々―』『世界』二〇〇一年一月号、岩波書店
- (6) 内田知行『共生の思想―戦時下の自由学園北京生活学校』『日本植民地研究』第一号 一九九九年六月 日本植民地研究会
- (7) 小島勝・木場明志『アジアの開教と教育』一九九二年三月 法蔵館 その他。
- (8) 槻木『大陸布教と教育活動―日中戦争下の日語学校―』『同朋福祉(人間福祉編)』第二号 一九九六年三月 その他。
- (9) 『浦潮日報』浦潮日報社 露領浦潮斯德市キタイスカヤ街二一番 藤本幸太郎『太田覚眠師 追想録』昭和三十八年六月
- (10) 外務省記録『不逞団関係雑件 朝鮮人ノ部 在西比利亜』
- (11) 水谷英三『太田覚眠の二書』『別冊 わがふるさと』平成一〇年三月 四日市市文化振興財団
- 秀トシコリ『太田覚眠老師 そのルーツを訪ねて』一九八二?
原稿用紙一〇五枚に手書きされたもの。秀トシコリ氏については不明。

倉橋正直氏の好意による。

吉村貫練『仏教世界の人物』東京帝国大学仏教青年会

(13) 常光浩然『近代仏教界の人間像』昭和三十七年一月 世界仏教協会

(14) 加藤九作『シベリア記』昭和五五年四月 潮出版

(15) 曹洞宗宗務庁『曹洞宗海外開教伝道史』昭和五五年一月

(16) 延吉県公署教育局『延吉県教育一覽』康徳二年八月

(17) 『昭和九年度 間島星華学校 学事状況 経費決算 報告書』外務省記録

(18) 曹洞宗宗務庁伊東俊彦氏のご教示による。

(19) 曹洞宗『宗報』第六七二号 大正一三年二月一五日
浜名寛裕については詳細は不明。

(20) 曹洞宗『宗報』第七四三号 昭和三年六月一日

(21) 樋口芝巖師の経歴については、仲彰一『大沢山 龍溪院誌』昭和五一年九月、および曹洞宗宗務庁伊東俊彦氏のご教示による。

(22) かつて龍溪院には「観世音」が所蔵されていたが、事情により現在は見ることができない。

(23) 谷洞水の経歴については曹洞宗宗務庁伊東俊彦氏のご教示による。

(24) 『間島龍井村の学校の興廢』槻木『中国吉林省龍井村の朝鮮人学校』『国立教育研究所紀要』第二二集 平成四年三月

(25) 編纂委員会『浄土宗 海外開教へのあゆみ』平成二年三月 浄土宗開教振興協会

(26) 『浄土教報』第六六七号 明治三十八年一〇月三〇日

(27) 『時事 営口通信 峯旗渡清僧消息』

(28) 外務省記録『各国に於ける学校関係雑件』自明治四二年一月

(29) 『浄土教報』第一二二六号 大正三年八月二八日『南滿洲視察記』小倉生

(30) 『浄土教報』第七四八号 明治四一年一月二七日『峯旗氏の北進』

(31) 『浄土教報』第一二二九号 大正三年九月一八日『南滿洲視察記』小倉生

(32) 『浄土教報』第一二二六号 大正三年八月二八日『南滿洲視察記』小倉生

(33) 外務省政務局『清国傭聘本邦人名表』明治四四年? 明治四五年四月末現在、大正元年一二月末現在、大正二年一二月末現在、大正三年一二月末現在、外務省記録

(34) 『浄土教報』第一九八五号 昭和八年四月二三日『日滿両国の関係と宗門

への期待」

- (34) 『大衆人事録』第一四版 昭和一八年 帝國秘密探偵社
- (35) 『峯旗良充氏講演 國策上より観たる吉林の開発』『吉林省開発と豆満自由港 附豆満江より覗きたる満蒙』大正一四年九月 財団法人奉公会
- (36) 浄土宗「宗報」昭和一八年三月号「地方 峯旗氏追悼会」
浄土宗東京事務所袖山榮真氏のご教示による。
- (37) 外務省記録「水野梅曉清國視察一件」
- (38) 槻木「中国吉林省 間島光明学校の展開―滿洲における日本の朝鮮族政策と日高丙子郎―」
『戦前日本の植民地教育政策に関する総合的研究』文部省科学研究費報告書 一九九四年三月
- (39) 栗原伸道『新京の地図』昭和五七年一月 経済往来社
- (40) 「光明会 山崎弁榮（一八五九―一九二〇）の首唱した如来光明主義を奉ずる人たちの信仰団体の名称。弁榮は一九一四年（大正三年）に光明会趣意書を頒布公表」『浄土宗大辞典 一』昭和四九年四月 編纂委員会
- (41) 「弁榮聖者の追憶 日高丙子郎談 昭和八年一月頃」『光明』
平成六年一一・一二月号 第七二一・七二二号 光明会本部
- 光明会関係資料は光明会杉田善孝氏のご教示による。
- (42) 河波昌「山崎弁榮」『浄土仏教の思想』第一四卷 一九九二年一月
- (43) 松尾仁海「光明王国建設」『観照』第三一号 昭和八年一月四日
- (44) 日高丙子郎「上人の追憶」山崎弁成「ミオヤの光 輪廻の巻」昭和四〇年一二月
- 『観照』第三〇・三三三号 昭和七年一二月四日、昭和八年一月四日、昭和八年二月四日、昭和八年三月四日
- (45) 外務省記録「光明学園関係一件」
日高の伝記については『荻岐新聞』第一七八二号 平成三年一月三日
大浦貫道「芦辺町の先覚者 日高丙子郎」『芦辺町史』昭和五三年三月
- (46) 国立国会図書館所蔵「斎藤実関係資料」
- (47) 昭和七年一一月九日付斎藤總理大臣宛て
「日本仏教人名辞典」一九九二年一月 法蔵館 の「山本玄峰」の項目
には「三六年中国新京（長春）に妙心寺別院を創建」とある。

アジアにおける日本宗教教団の活動とその異民族教育に関する覚書

- (48) 「大道社の解散」『中外日報』大正六年一一月八日
- (49) 『神道大辞典』第一卷 昭和一二年七月
- (50) 明治三十九年一月二十日の川合清丸の書簡には次ぎのように書いてある。
「日高氏は当時いづこに在りや、同氏も十分の壮健にも無之此の嚴寒如何やと案じ居申候、御逢ひの事も候はば近況御一報願上候」刊行会「川合清丸全集」第一〇卷 昭和八年三月
- (51) 鳥尾得庵「得庵全書」川合清丸編 明治四四年四月四日
- (52) 『得庵全書』及び国立国会図書館憲政資料室所蔵寺内正毅関係文書所収
- (53) 国立国会図書館憲政資料室所蔵真崎甚三郎関係文書
- (54) 前掲「芦辺町史」

本研究は学術振興会科学研究費補助金（代表 大谷大学 木場明志）「植民地期中国東北地域における宗教の総合的研究」の一環をなすものである。